

茅ヶ崎市立小和田小学校

研究テーマ：一人ひとりの「考えたい」をふくらませる授業づくり

1、実践の目的

本校の児童は、「知識・技能」に係る資質・能力が比較的高い傾向にある一方で、「なぜそう思うのか？」について自分の言葉で表現する「思考・判断・表現等」に係る資質・能力に課題があると私たちは捉えた。自分の考えを表現する場では、「正解か不正解か」への意識が強く、教師が期待する答えを出そうとする姿も見受けられた。これらの実態から、「友だちの考えをもっと聴きたい」「自分の考えをもっと伝えたい」「もっと考えたい」と、学びに対して主体性をもち“自分ごととして”取り組む児童に育ててほしいという願いをもった。そこで、教室にいる全員が、他者の考えにふれることで自らの考えを深めていく「一人ひとりの『考えたい』をふくらませる授業」を目指し、「協同的探究学習」を手立てとして授業研究を進めた。

2、実践の内容

(1) 校内研究の体制

授業研究は、学年で一つのチームになって行う。各学年に、研究グループ所属職員を1名おき、研究グループ会議において、所属学年の研究授業の内容、進捗状況等を共有している。校内授業研究会では、各学年1学級ずつ授業を公開し、全員で協議会を行う。なお、当該学年の授業者以外は、研究授業の前後に授業公開をする。また、校内授業研究会に加え、低・中・高学年に分かれてのブロック研究会を行う。ここでは、授業の事前検討、本時授業公開及び協議会を行う。

(2) 校内授業研究会の流れ

①研究授業の構想

月に一度設定されている学年研究日において、児童の実態や高めたい力、取り組みたい授業内容について共有し、授業を構想する。その際、「単元構想シート」と「授業構想シート」(※(4)参照)を活用する。

②校内授業研究会当日

当日は、1学級の研究授業を全職員で参観する。参観の際は、“児童の実態の姿をもとにしながら”「導入問題や展開問題は適切か」「評価基準は適切か」等を見とる。参観後は、「児童の『考えたい』がふくらんだ瞬間」の見とりを、参観者がロイロノートに記入した上で協議会に臨む。協議会では、参観者の見とりや、本時で実際に児童が書いたワークシートをもとに、「本時で高めたい力は高まっているか」に向けて全体で協議をする。

(3) 協同的探究学習について

協同的探究学習は、本時で高めたい力(思考・判断・表現等に係る資質・能力)を高めるために、非定型の問いを中心にして授業を組み立てる。1時間の授業の流れは次のとおりである。

①【個別探究Ⅰ】多様な考えをもつことができる非定型の問い(導入問題)に個人で取り組む。②【協同探究】導入問題に対する考えを伝え合い、全体で多様な考えの関連づけを行う。③【個別探究Ⅱ】協同探究を生かし、考えを深めるための非定型の問い(展開問題)に取り組む。

(4) 授業づくりの軸について

「思考・判断・表現等」に係る資質・能力を高めるために、児童が知識を関連づけて本質に迫るような授業（協同探究学習による授業）を組み立てるには、授業者が「教材の本質」「単元や本時で高めたい力」という“授業の軸”を明確にもち、それを可視化することが必要不可欠であることに気づいた。そこで、「単元構想シート」と「授業構想シート」を作成した。

① 単元構想シート

単元を通して高めたい力を明らかにし、「思考・判断・表現等」に係る資質・能力を高める授業を単元のどこで行うかを考える。

② 授業構想シート

本時で高めたい力（思考・判断・表現等に係る資質・能力）を明確にし、導入問題や展開問題等を考える。協同探究場面でのように教材の本質に迫るかを具体的にイメージできるよう、本質に迫るための問い（追究型発問）を想定したり、児童の発言の関連づけを考えたりする。評価場面について、児童がどのような姿になっていけば高めたい力が高まったと言えるのかを考える。

3、実践の成果

(1) 児童の変容

- 一人ひとりが課題に向き合い、「正解」「不正解」とらわれることなく、自分なりの考えをもち様々な形で表現する資質・能力が身に付いてきた。
- 協同探究において、他者と自分の考えとを比較しながら話を聴こうとする資質・能力が身に付いてきた。
- 協同探究を生かし、考えを深め、今後の学習に繋がられるようになってきた。

(2) 教師の変容

- 「教材の本質」「単元や本時で高めたい

力」が授業の軸になることに気付けた。

→それらを意識しながら、

- 児童の実態に即した、一人ひとりの多様な考えを引き出せる問いを設定することができるようになった。
- 児童の話を聴き、児童同士の考えをつなげたり問い返したりすることができるようになった。

○職員全員での参観・協議によって、目指す児童の姿や授業への共通イメージをもつことができた。

4、今後の展開

(1) 今後の課題～児童の姿と教師の課題～

- 考えを記述できるようになったが、発言となると、一部の児童に偏ることがある。
- 挙手の有無に関わらず、授業の流れやタイミングに応じて、様々な児童の考えを引き出す工夫が必要である。
- 協同探究において、児童自ら他者の考えにつなげていくことが難しい。
- 児童自らが、互いの考えのつながりに気づき、「教材の本質」に迫れるような、さらなる追究型発問の設定や板書の工夫が必要である。

(2) 今後の研究の方向性

- 「単元を通して高めたい力を設定し、単元計画を立て、本時で高めたい力を明確にした上で授業をつくる」という授業づくりの軸を日頃から繰り返していき、それを職員同士で共有していく。
- 学年研究日の継続
- 授業構想シートの改良
- 授業への考え方や児童の見とり方について、研究をより広げ深めていく。
- ブロック研究会の設定(事前授業参観及び検討・授業参観・協議会)
- 思考の深まりに繋がる板書計画の共有